



馬耳東風

先日、友人に誘われ明治大学平和教育登戸研究所資料館及びキャンパス内に残された史跡の見学会に参加した。同館は、明治大学農学部がある生田キャンパス内に2010年に開設された。生田キャンパスは、旧日本陸軍が秘密兵器を開発する目的で1937年に開設し、外部にその研究・開発内容を知られないように「登戸研究所」という秘匿名で呼ばれていた組織の跡地の一部である。敗戦と同時にすべての関係書類や実験器具をただちに焼却・埋却処分するなど証拠隠滅作業が徹底的に実施された。また所員も戦後長く沈黙し続けたため、登戸研究所の実態は戦後40年以上不明のままであったという。しかし1980年代に反核・平和運動が高まり、全国の高校で「平和ゼミナール」活動が始まった中で、登戸研究所に関する調査活動が川崎市・法政第二高校及び戦争末期に登戸研究所が移転した長野県の赤穂^{あかほ}高校の生徒らによって、元所員の聞き取り調査が始められた。最初は口を堅く閉ざしていた元所員達も、高校生のひたむきな態度に次第に重い口を開くようになり、次々と実態が明らかになり、また資料も少しずつ見いだされてきたことから、戦後65年を経た2010年、ようやく上記の資料館開設に至ったという。

登戸研究所では、電波を使用して人体を攻撃する兵器の研究、風船爆弾、暗号文書をやりとりするための特殊インキの開発やその発見方法の研究、暗殺用の毒物兵器、放火資材の他、経済戦略として偽札製造技術を開発し大量の中国紙幣を製造していたという。中でも私が深く考えさせられたのは生物兵器の開発研究である。敵国の食料生産に大打撃を与えることを目的として小麦に被害を与える小麦条斑病菌、実をつける前に稲を枯らせてしまう小粒菌核病菌、そして動物では牛疫が研究対象となっていたのである。

牛疫ウイルスを兵器として用いる研究は、登戸研究所が中心となり、朝鮮総督府家畜衛生研究所（以下「釜山家畜研」）の協力を得たという。研究内容は、1) 強毒野外牛疫ウイルスの分離、継代と毒力試験、2) 乾燥牛疫ウイルスの製造、3) 粉末ウイルスの実践応用予備験実験、と順を追って釜山家畜研で実施された。そして最終的に4) 実戦用牛疫野外感染実験が、同研究所近くで実施された。供試牛10頭を適当な間隔で繋留し、第一線牛3頭の風上30m地点で粉末ウイルスを花火を使って打ち上げたところ、牛群全体を包み込むように粉末ウイルスが飛散し、3日後に発病、7日前後で全頭が死亡した。この成功を受けて参謀本部で会議が開かれ、「実戦に応用することが可能である」ということで意見の一致をみたが、最終的に東條陸軍大将は「風船爆弾を用いて牛疫ウイルスで米国内の牛を攻撃、これを殲滅した場合、わが国の稲を収穫期に焼却されるおそれがあるので中止する」として、実際に使用されることはなく、風船爆弾には通常の爆弾や焼夷弾が搭載された。なお、牛疫ウイルスの研究は、満州一〇〇部隊（関東軍軍馬防疫廠）でも実施されていたという。

かつて「悪魔の飽食（森村誠一・角川文庫）」により、捕虜を人体実験に使ったという七三一部隊や炭疽菌、鼻疽菌、牛疫ウイルス等の製造及び実験研究をする上記の満州一〇〇部隊の存在は知っていた。しかし遠い過去の狂気の時代の話で身近なこととしては受け止められなかった。ところが今回「資料館」の見学会に参加し、展示資料や関連書籍（「陸軍登戸研究所の真実」―伴 繁雄・芙蓉書房出版―）の中に先輩に当たる先生方のお名前を見いだして少なからぬ衝撃を受けた。先生方の生前、生物兵器開発研究に携わったとの話は聞いたことがなかったからである。戦時下では病原体を兵器とする研究への疑念や抵抗は少なかったであろうが、戦後は複雑な思いを持たれて沈黙する他なかったのであろう。平和でこそ生きる獣医学を願う。（久）